

佐読進協第16号

平成25年6月17日

読書推進運動協議会員長 様

佐賀県読書推進運動協議会長

「読書推進運動」について（送付）

公益社団法人読書推進運動協議会から送付されましたので、お送りします。

【担当】

佐賀県読書推進運動協議会 事務局（佐賀県立図書館） 諸岡

〒840-0041 佐賀市城内二丁目1番41号

TEL：0952-24-2900

FAX：0952-25-7049

Eメール：morooka-hidetaka@pref.saga.lg.jp

# 読書推進運動



公益社団法人  
読書推進運動協議会

〒162-0828  
東京都新宿区袋町6  
日本出版クラブ会館内

TEL 03(3260)3071

FAX 03(5229)1560

発行人 岩田 文二

編集人 片岡 伸子

No.547

★「全国読書グループ調査」協力のお願い(2頁)

★出版界「東北バス・スタディツアー」参加記(5頁)

定価60円

会員の購読料は  
会費の中に含まれる



雑誌愛読月間  
2013.7/21-8/20

「雑誌愛読月間」によせて

## 雑誌と読者がつながる機会に

一般社団法人日本雑誌協会  
事務局長

たかはしけんじ  
高橋憲治

雑誌愛読月間(7月21日～8月20日)は、雑誌協会の主催となり、今年で15年目を迎えます。

今年の雑誌愛読月間のイメージキャラクターは能年玲奈さん。NHK朝ドラ「あまちゃん」のヒロイン。もともと雑誌「ニコラ」のモデル出身です。キャッチフレーズは「おや? まあ? へえ!」。

雑誌は、いつも新しいことに気づかせてくれる。気になつて読みすすめると、思いがけない出会いをしたり、なるほどって納得したり。雑誌って、私の世界をひろげてくれる存在なんだ。

「おや、まあ、へえ」は、昔から雑誌づくりのキーワードと、いわれています。読者にそう思われる記事、紙面構成

ができれば、読者に支持される雑誌になれる。たとえ難しいテーマであっても、独自の視点で、おもしろく、興味、関心が湧いて、それでいて実用性を兼ね備えている、いわば雑誌づくりの原点です。

今年で13年目になる目玉企画の「年間定期購読キャンペーン」(日本書店商業組合連合会、日本出版取次協会との共催)は50の雑誌社、対象誌126誌と過去最高になります。

スタート当初は15社15誌で、定期購読の精算の仕組みもない状態でしたが、いまでは取次会社専用システムや定期購読専門の会社も軌道に乗っています。このキャンペーンは、月刊誌を1か月分割引で読者に提供し、参加書店には予約実績に応じて出版社がその分

を還元する、読者謝恩、書店支援企画の一環です。

昨年からは電子書店と連携して電子雑誌のプロモーションを始め、今年独自のアプリをリリースするほか、取次会社、リアル書店と連携して紙とデジタルのハイブリッド販売促進を目指しています。

この試みは、雑誌と読者、消費者の接点を増やしていくことが目的です。

ところで、ネット・デジタルの進化、スマホの浸透により、雑誌を取り巻く環境は一変しています。昨年の毎日新聞社の「全国読書調査」では、初めて雑誌の読書率が書籍のそれを下回ったように、各種調査で雑誌の読者率の低下が目立っています。とくに子どもや20代までの若い世代が雑誌に触れる機会が低下している事実を真摯に受け止めています。

どうすれば雑誌が復活できるのか。雑誌出版社の団体としては重大な問題です。雑誌協会では、雑誌価値再生委員会を発足し、現実に向き合い、タブーなしの議論をしています。読み手に刺さる、リコメンド機能の高い、深みのある特集、個性的な雑誌を生み出すムードづくりを指向します。昨年来行ってきた編集者の仮説に基づく独自の調査による提言を、ニューマガジントライアル運動へつなげていきます。

私と同世代の坪内祐三さんの著書「私の体を通り過ぎてきた雑誌たち」は、雑誌黄金時代を若者として経験した世代の共通の感覚を体現しているのではないのでしょうか。週刊誌のスクープ報道に象徴される雑誌発の話題は健在です。「時代を映す鏡」という雑誌の性格も変わりません。この機会に、雑誌をバラバラと開いてみませんか。

# 2013 雑誌愛読月間

期間・7月21日(日)～8月20日(火)

主催/一般社団法人 日本雑誌協会 後援/公益社団法人 読書推進運動協議会



2013 雑誌愛読月間ポスター

## 「あまちゃん」の能年玲奈さんが ポスターに登場!

一般社団法人日本雑誌協会(雑誌協会)主催「雑誌愛読月間」の今年度ポスターが完成しました。公益社団法人 読書推進運動協議会は6月下旬に、道府県読書協と都道府県立図書館を通じて、全国の公共図書館へ8900枚を配布、ポスター掲出の協力をお願いします。

今年のキャッチフレーズは、「おや? まあ、へえ!」。イメージキャラクターの能年玲奈さん(女優)が、雑誌を広げ、新しい発見に目を覚ます姿が印象的です。図書館や書店ではポスター、雑誌協会加盟出版社の雑誌約30誌では広

告で、愛読月間をアピールします。雑誌広告に掲載される応募マークをはがきに貼って応募すると、抽選で2013名に能年玲奈さんのオリジナル図書カードが当たる愛読キャンペーンは、今年も実施されます。雑誌協会ホームページでは期間中、愛読月間特別コーナーを用意し、能年さんの撮影時のメイキングカットなど、さまざまなキャンペーンを紹介させていただきます。7月1日より始まる定期購読キャンペーンでは、対象雑誌の年間購読申込者に1か月分を無料で提供。今年も、過去最多の50社協誌が参加します。



大活字本専門店への期待と意気込みを語る安田信さん

## 「情報は命!」読書権保障を目指す

NPO法人 大活字文化普及協会は6月1日(日)、東京都千代田区の日本教育会館で「大活字文化普及シンポジウム 読書権保障の実現」を開催。だれもが自由に本を読み、必要な情報を得て発信する権利「読書権」の保障を目指す。各方面からの提言が交わされた。幼少時に視力を失った若井和彦さん(大活字文化普及協会理事)は「点字の本が少なく、大病をしても情報を得られなかった。視覚障害者だけでなく、本を持つ力がなくなった人やディスクレンシア、日本語が読めない人なども支援が必要。21世紀を読み書き情報のパラファリーの時代に」と語った。

全国の会員に資料を貸し出し、普及協会理事長の相賀昌宏さん(小学館社長)は「著作権の問題をクリアし、より多くの大活字本や点字本を必要とする声に応えるのが出版社の役目」と、理事の柴田信さん(岩波ブックセンター会長)は、神保町の大活字本専門店「誰でも読書館」のリニューアル計画を紹介し、「全国から見学者が来るような画期的な書店にしたい」と、読書権普及に向けて出版社、書店の取り組みを述べた。

# 2013年度 「全国読書グループ調査」実施



全国の図書館、読書グループのご協力をお願いいたします

公益社団法人 読書推進運動協議会は、全国公共図書館協議会の全面的な協力をいただき、「2013年度 全国読書グループ調査」を実施します。5月末に、各道府県読書協および各都道府県立中央図書館へ、調査協力をお願いし、各市町村立図書館への調査票をお送りしました。

また、今回はグループの活動場所も複数、回答いただきます。前回は、学校図書館だけで活動しているグループは対象外でしたが、今回は調査対象とします。公共図書館が把握している範囲内でお願います。活動内容と場所を複数回答としたことで、グループの活動実態をより反映する結果が期待できます。



幻想的な泉鏡花の世界をそのままにした「絵本 化鳥」

4月26日(日)、東京・新宿区の本出版会館で、「第47回 造本装幀コンクール」(主催/一般財団法人日本書籍出版協会、一般財団法人日本印刷産業連合会)の審査会が行われ、それぞれの賞、21点が選ばれた。

「第47回造本装幀コンクール」各賞決定



菊池団長(左)、相賀副団長(中央)によるPEP Kids Koriyamaへの児童書目録贈呈

■出版界「東北の力を学ぶバス・スタディツアー」参加レポート

### 過去の記録、教訓を活かすことの大切さを学ぶ

筑摩書房代表取締役会長 菊池 明郎

昨年11月に続いて第2回目の「被災地バス・スタディツアー」が5月12日に、「大震災」出版対策本部、日本出版クラブ、大震災出版復興基金、読書推進運動協議会、出版文化産業振興財団の主催で開催された。今回は初めて業界紙の記者の方々が参加されたので、各紙の報道で概要はおわかりのことと思う。

すでに2年3か月が経過したとはいえ、参加者もまだ被災各地の実態、そして支援の方法などよくわかっていないのが実情である。

「バス・スタディツアー」は私たちにとって被災地のおかれた状況を知り、復興のためにはなにが求められているのかを理解するいい機会であった。

今回は初めて福島県に入り、原発事故関連の問題をどう受け止める、どのように理解し協力していくのかを、多少なりとも学べたのではないかと感じた。

最初に訪問したのが「PEP Kids Koriyama」(郡山市)だった。この施設は放射線の影響で屋外で遊べなくなった子どもに向けて、ヨークベニマルが提供した建物にNPO法人「郡山ベップ子育てネットワーク」が開設した。中には砂場、水遊び場、そしてかけっこができるスペース、読書コーナー、そしてトークショーなどができる部屋が設置され、当日も多数の親子で賑わっていた。関係者の話では、まだまだこういう施設は足りないとのこと。復興予算は

「被災地バス・スタディツアー」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」と

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもたちがへあしたの本」プロジェクト」から、約1000冊の児童書目録の贈呈式が行われた。また出版各団体が協力した、速水けんたろうさんと比嘉久美子さんの「お話し会」を見学した。

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」と

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」と

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」と

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」と

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」と

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

「子どもが必要とする施設建設に、優先的に使ってほしい。」

### 第五十二回全出版人大会

### 読書推進を再確認する年に！

5月8日(木)、東京・千代田区のホテルニューオータニにて、「第五十二回・全出版人大会」(主催「一般財団法人日本出版クラブ」)が開催され、出版関係者約60人が出席した。

冒頭、野間省伸大会委員長が、東日本大震災の復興支援活動について、「継続していくことが大切」と呼びかけた。武田一美日本出版クラブ専務理事からは、出版界からの支援が「大震災出版復興基金」を含め、4億円を超えたことが報告された。



記念対談の浅田次郎氏(左)と佐藤隆信(新潮社社長)

藤隆信新潮社社長が大会声明を朗読。「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。来賓の谷川弥一文部科学副大臣と浅田次郎日本ベンチクラブ会長の祝辞につき、安倍晋三首相の祝辞が代読された。

長寿者29名の表彰と、永年勤続者30名の表彰の後、浅田さんと佐藤大会委員長が対談を行った。電子書籍について、浅田さんは「携帯電話では、すれ違いの悲劇は起きない。つながらないのは受け手に悪意があるときだけ。ストーリーを作りづらい」としながらも、「紙媒体の読者が電子書籍に乗り換えるのではなく、紙の読者の上に電子の読者が乗るのではないか」と持論を披露。最後に、佐藤委員長は、「よい出版環境を整えれば、デジタルがあっても出版の未来は明るい」と結んだ。

「昨年大会の頃、被災地では衣食住がままならない中、再開した書店で本や雑誌を買い求める人々の姿があり、私たちは、出版人としての使命感を新たにしました。そして昨年は、あの未曾有の惨禍を自らの表現で作品にしようとする書き手たちに出会い、多くの成果を出版することが出来ました。日本の出版文化は、日本の伝統建築のようにしなやかで強い。しかし、そうした書き手と読み手をつなぐ出版業の土台が、今大きく揺らばれています。」

「昨年大会の頃、被災地では衣食住がままならない中、再開した書店で本や雑誌を買い求める人々の姿があり、私たちは、出版人としての使命感を新たにしました。そして昨年は、あの未曾有の惨禍を自らの表現で作品にしようとする書き手たちに出会い、多くの成果を出版することが出来ました。日本の出版文化は、日本の伝統建築のようにしなやかで強い。しかし、そうした書き手と読み手をつなぐ出版業の土台が、今大きく揺らばれています。」

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

### 大会 声明

### 第五十二回 全出版人大会



福島第二原発サイトシュミレータ室で増田所長を囲む参加者たち

数多く積み上げられたところを通り抜け、Jウィレレッジ近辺の駐車場に到着した。観光バスから東電の小型バス3台に乗り換え、福島第二原子力発電所へと向かった。私たちが会議室で待ち構えていた増田尚宏所長以下の幹部たちより、12メートルの津波に襲われた震災当時のこと、第一原発と同様、全電源喪失となったが第二原発では計量盤の数字を確認できたため、原子炉の状態が把握できたこと、そして丸一日経過した後4系統の送電線のうちひとつが回復し、原子炉を冷温停止に持ち込むことができて今日に至っているという説明がなされた。

さらに中越地震の被害を受けた柏崎刈羽原発や、チェルノブイリ原発事故の教訓が役に立ったという。過去の経験に学ぶことの重要性を認識し、現在、300を超える教訓をまとめているところだそう。すでに今回の教訓を生かし、電源車を会議棟のそばに4台配置し、さらに標高の高い場所にガスタービン発電機を置き、非常用バッテリーも必要台数を確保している。また、15メートルほど頑丈な土嚢を積み上げて津波の襲来に備え、あるいは津波によって破壊された扉を強固なものにするなど、

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

### 原発事故の教訓を未来へ

さらにバスは浜通りへと向かい、途中除染された土などが入っている大きな黒い袋が道路沿いに

「知の拡大再生産」とは、出版物が継続して発行され、著者に正当な利益が還元され、未来の著者が誕生し、新しい著作物が創造されることを保証される状況」とし、「デジタル活用利用の明と暗を意識して取り組む課題を、業界が連携して再確認する年」と結んだ。

優良読書グループの歩み (6)  
平成24年度の「読書週間」に際して郡道府県読進協より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。(順不同)

はらべこあおむし

代表者 永井 幹子  
秋田県能代市  
(推薦)  
秋田県読書推進運動協議会

私たちが読み聞かせグループをはじめたきっかけは、夢と希望を膨らませる絵本をとおして、子どもたちに豊かな想像力を持つてほしいとの思いからでした。近くの小学校からスタートし、小さな活動はいつの間にか10年となり、現在は同志5人で活動を続けています。

小学校での読み聞かせは、さわやかな朝の時間に元気な児童たちと会えるのが楽しみでした。小学校が統合される前の2007年(平成17年)に、児童と一緒に音楽とおはなしをジョイントさせた開校セレモニーのイベントを行いました。児童はもちろん、地域のみんなにも喜んでもらい、とても

いい思い出になっています。いままも継続している活動では、地域の3つの子ども園に毎月1回ずつ訪問します。年齢ごとにお部屋で待っていてくれる子どもたちは、おはなしをよく聞いてくれます。子育て支援センターでは、赤ちゃんが母親を抱っこされながら、安心して絵本をみてくれます。子育てでたいへんな母親も、赤ちゃんと一緒に絵本を楽しんでくれます。また、放課後の留守家庭の児童が、児童館での絵本の読み聞かせを毎月楽しみにして待っています。

それぞれの場所で行っている年齢の子どもたちにあわせて読み聞かせをするときに、いちばん気遣うことは、どの絵本を読むのか選んで、どの順番で読むかと準備をすることです。子どもたちに喜んでもらえるだろうか、興味を持ってもらえるだろうか迷うこともありますが、ひとたび子どもたちの前へ出てからは、もう迷ってないかいられません。一緒に絵本の世



会場や子どもたちにあわせて読み聞かせを心がけて

読み聞かせ「あすなろの会」

代表者 手面千代重  
茨城県筑西市  
(推薦)  
茨城県読書推進運動協議会

本会は、子どもたちに絵本の読み聞かせや紙芝居、民話を語り、健全な幼児育成と文化向上、そして会員相互の親睦を図ることを目的として、1987年(昭和62年)9月19日に創設されました。当初は、おはなしを聞きに来る人は多くありませんでしたが、年少時から小学6年生まで聞きにきてくれた男の子がおり、その子に「あすなろの会」から皆勤賞をあげました。

ほかに、おはなしを聞いて、もう一度自分で本を読みたくなり、図書室で本を探す子どもたちも見られました。なかには、ブラックシアターのおはなしを聞いて「幼稚園のころを思い出しました」と手紙をくれた女の子もいました。子どもたちは、おはなしを聞いたり、絵本を読んでもらうのが大好きです。その子どもたちが大人になったとき、「読み聞かせ」が

思い出となり、本の好きな人成長してくれることを願って活動してきました。現在は、絵本のほか、手作りの大型紙芝居、パネルシアター、カーテンシアター、ペープサート、そして自慢のブラックシアターなどの作品にあわせて、音楽や効果音を取り入れ、生の声で読み聞かせをし、手作りの楽しさを伝えていきます。

月一回、筑西市立中央図書館で読み聞かせと折り紙遊びなどを行っており、参加者に楽しんでもらっています。親子でお喋りしながら折ったり、隣の子が折り方を教えてくれたりする姿が見られ、楽しい交流の場となっています。終了後、教わった折り紙を復習する子どももいます。そのほか、市内小学校での月一回の朝の読み聞かせでは、学年にあわせておはなしを用意して行っています。幼稚園、保育園からの依頼で開催する誕生会や、母親学級、子育て支援センター、老人ホームなどの訪問で、地域とのふれあひも活動のなかで楽しんでいきます。

多くの方々との出会いと関わりを支えられ、成長し、活動もできたことに感謝しています。これからも、よいおはなしと楽しい時間を届けていきたいと思っています。

島根県立図書館 成人読書会Cグループ

代表者 島田 妙子  
(推薦)  
島根県読書推進運動協議会

私たちの会は、1973年(昭和48年)に婦人読書会第5期生として始まりました。

最初は読書会リーダー養成講座に集まった人たちが、1年間の研修のあと、成人読書会グループに希望者のみ入れていただいたことと記憶しています。

それ以来、40年、最初は人数も多かったのですが、転勤族の奥さまが多かったのと、年を重ねるうちに年配だった方が病気で抜けられたりお亡くなりになったり、現在は3名でなんとかクラスの灯を守っている状態です。

安来から松江まで、月一回とはいえ、40年もよく通ったと自分でも思います。これだけ長く続けら



千冊以上の本を読み合ってきた40年末の仲間

れた理由は、いろいろな面に好奇心が強くユニークな方が多かったこと。たとえば皮細工の巧みな方、造花の先生、お料理プロ級の方など。もちろん読書に対する情熱はいうまでもありません。

読書会で話したあと、それぞれの得意分野での話題に花を咲かせ、当時の種々の新知識などもだれかが持ち込んで話題となりました。ときには食事に出掛けたり、近くの名所旧跡を訪ねたり、おたがいのお宅を訪問していろいろな教養を出会っていました。

最高だったのは、なんでも本音で語りあえたことでした。出逢い

しゃぼんだま

代表者 益田 洋子  
熊本県上天草市  
(推薦)  
熊本県読書推進運動協議会

私たちの読書支援ボランティアグループ「しゃぼんだま」は、メンバーのひとりが図書審議員となつたことをきっかけに誕生しました。なにか具体的な取り組み

をしたいと思いますところ、ラジオで本の読み聞かせがいいと聞き、友人を誘い5人で2000年(平成12年)12月に発足しました。現在は、当時よりメンバーも増え、11年目を迎えています。

毎月第2土曜日に図書館で行う定例のおはなし会では、絵本や紙芝居、パネルシアターを用いた読み聞かせだけでなく、子どもたちにも少しでも楽しんでもらえるように、おはなし会の中に、手遊びや、歌、工作の時間を組み込むなどの工夫を行っています。毎月第2木曜日の夜は、図書館にメンバーが集まるので定例会議を開催し、次回のおはなし会のテーマや工作の内容を決めたり、事前準備を行ったりしています。また毎月第1、第3木曜日に行う自主活動も続けており、おはなし会をよりよくしていくための研鑽を、すべてのメンバーが日々積み重ねています。

私たちの活動の大きな柱として、図書館で行う定例のおはなし会とは別に、訪問おはなし会があります。この訪問おはなし会は、松島町にある小学校や保育園にあらかじめ、ご希望をうかがい、小学校や保育園から指定された時間にメンバーが現地へ出向いて読み



聞かせを行うというものです。この訪問おはなし会ですが、私どもの活動が少しずつ地域の方に認知いただいていたのか、2011年度(平成23年度)は、90回実施することができ、多くの方にたくさんのおはなしを届けることができました。

また、最近では、上天草市で開催される男女共同参画フォーラム、生涯学習発表会、童謡発表会などの行事で行われるアトラクションのゲストとしても招いていただけるようになりました。

今回、優良読書グループにご推薦いただきたくという、すばらしい機会をいただきました。今後ますます、さまざまな活動を行うことに対して、身が引き締まる思いです。読み聞かせなどの活動を続けることにより、私たちが紡ぐおはなしを聞いてくださった方々が、物語に興味を持ち、読書の魅力を感じることで、少しでも本に親しむ習慣を身につけるお手伝いできれば、思っております。

■日本児童文芸家協会が4賞贈呈式を開催

挿絵、ブックデザイン、  
読んでくれる仲間と得た荣誉

日本児童文芸家協会は、5月24日(金)、東京都新宿区代田区のアルカディア市ヶ谷にて日本児童文芸家協会賞ほか4賞の贈呈式を行った。

第8回福田清人賞

(該当作なし)

第52回児童文化功労賞

加古里子、立原えりか、宮川ひろ

協会賞受賞の石崎さんは、「物書きになってから誉められたことがないので、とまどっています。多くは文章担当。挿絵、ブックデザイン、編集のチームでこの本を作りました」と喜びと関係者への感謝を述べた。新人賞の奥山さん

第37回日本児童文芸家協会賞

『世界の果ての魔女学校』

石崎洋司(講談社)

第42回児童文芸新人賞

『遙魔が時のものがたり』

奥山ひろみ(学研教育出版)

■日本児童文学者協会が協会賞ほか贈呈式を開催

子どもたちに寄り添い、  
描いた作品が受賞

日本児童文学者協会は、5月31日(金)、東京都中野区の中野サンラザにて日本児童文学者協会賞ほか各賞の贈呈式を行った。

第53回日本児童文学者協会賞

『チャーシューの月』

村中李衣(小峰書店)

第46回日本児童文学者協会新人賞

『李子の休重計』

いとうみく(童心社)

第17回三越左千夫少年詩賞

『ねこたちの夜』さわだまゆり(出版ワークス)

『おーい山ん子』

最上二郎(らくだ出版)

第12回長編児童文学新人賞佳作

しめのゆき、せいのおつこ

第4回子どもための感動ノン

フィクション大賞 優良作品

小林祐三、秋川イホ

児童養護施設が舞台の作品で協会賞受賞の村中さんは「子どもた

ちの静かで強い思いをどう表現するか、視点を交え、子どもたちに寄り添って書いた」、新人賞のいとうさんは「仕事の合間を縫って、同人誌に投稿し、人を描くことを学んだ」と受賞作について語った。



左から奥山さん、石崎さん、宮川さん、立原さん、加古さん(代理)



丘峰三会長より表彰を受ける村中李衣さん

は、「原稿を何度も読んで磨いてくれた同人誌の仲間がいたからの受賞。一生をかけて探究していきたいものと出会えたことは幸せ」と、今後の創作活動への意欲を語った。

事務局報告(5月)

☆4月23日〜5月12日 『第55回』でもの読書週間』を主催

・3日〜5日 『第13回上野の森親子ブックフェスタ』開催

・8日 『第52回全出版人大会』に出席

☆10日 『機関紙「読書推進運動」(5月号)』発行

☆12日 『日本出版クラブと共催の「東北の力を学ぶバス・スタディツアー」に参加

☆14日 『読書推進運動』(5月号)発行

☆15日 『日本出版クラブと「大震災出版復興基金」について打ち合わせ

☆16日 『西村俊男監事』、『平成24年度決算報告書』の監査を依頼。その後、川畑敬昭監事、設楽教二監事に朝夕監査を依頼

・18日 『アニメーションで見る「絵本化鳥」展(大阪・九条)』出席

☆22日 『大震災出版対策本部運営委員会』へ出席

・23日 『国語子ども図書推進委員会』へ出席

☆24日 『平成25年度臨時総会開催案内』を全会別紙に送付

・24日 『講談社出版文化賞贈呈式』、『日本児童文芸家協会賞贈呈式』へ出席

☆27日 『全国公共図書館協議会』へ『全国読書クラブ調査』の協力依頼

・27日 『日本雑誌協会総会「パティール」へ出席

☆28日 『平成25年度第1回理事会』を開催。出席理事12名、出席監事1名

☆31日 『全国読書クラブ調査』の調査票を郵送封入図書へ送付

・31日 『日本児童文学者協会賞贈呈式』へ出席

●編集部と事務局の  
ひとこと

●「代読サービスで一番要望のあるのは、預金通帳の数字を読むこと」6月1日回に開かれた「大活字文化普及シンポジウム」で、函館視覚障害者図書館の森田直子さんの報告が第4条には「すべての人が生涯にわたって安心して読書を楽しむことができる環境整備への提言」を掲げています。「21世紀は読書のバリアフリー」の実現に向け、なにごであるのか思いを巡らせました。「たつたひとこと」であっても、息字一点一点に込められた情報は、命です」という筑波技術大学の学生たちの群読の声は、ずしりと重く心に響きました。

●「アニメーションで見る「絵本化鳥」展」を覗いてきました。絵本が動き出すのも秀逸でしたが、俳諧画家の中川学さん、書家の上田晋三さん、ブックデザイナーの泉屋宏樹さんによる「制作夜話」のトークで深夜まで盛り上がりました。カフェの片すみで行われたミニイベントですが、これぞまさしく浪花のエントレギー。

●岩波ホールの特設展だった高野悦子さんのお別れの会がありました。お目にかかったときはアンジェイ・ワイタ監督の「大理石の男」上映中。以後、「大地のうた」3部作、「恋の浮島」、「伽椰子のために」、「八月の扉」、「宋家の三姉妹」、「紙屋悦子の青春」、「シリアの花嫁」、「木洩れ日の家」など、多くの名画に出会わせていただきました。遺稿「岩波ホールと(映画の仲間)」(岩波書店)には、マダム・シネマのすばらしい生きざまが描かれています。(女)